



特59  
915



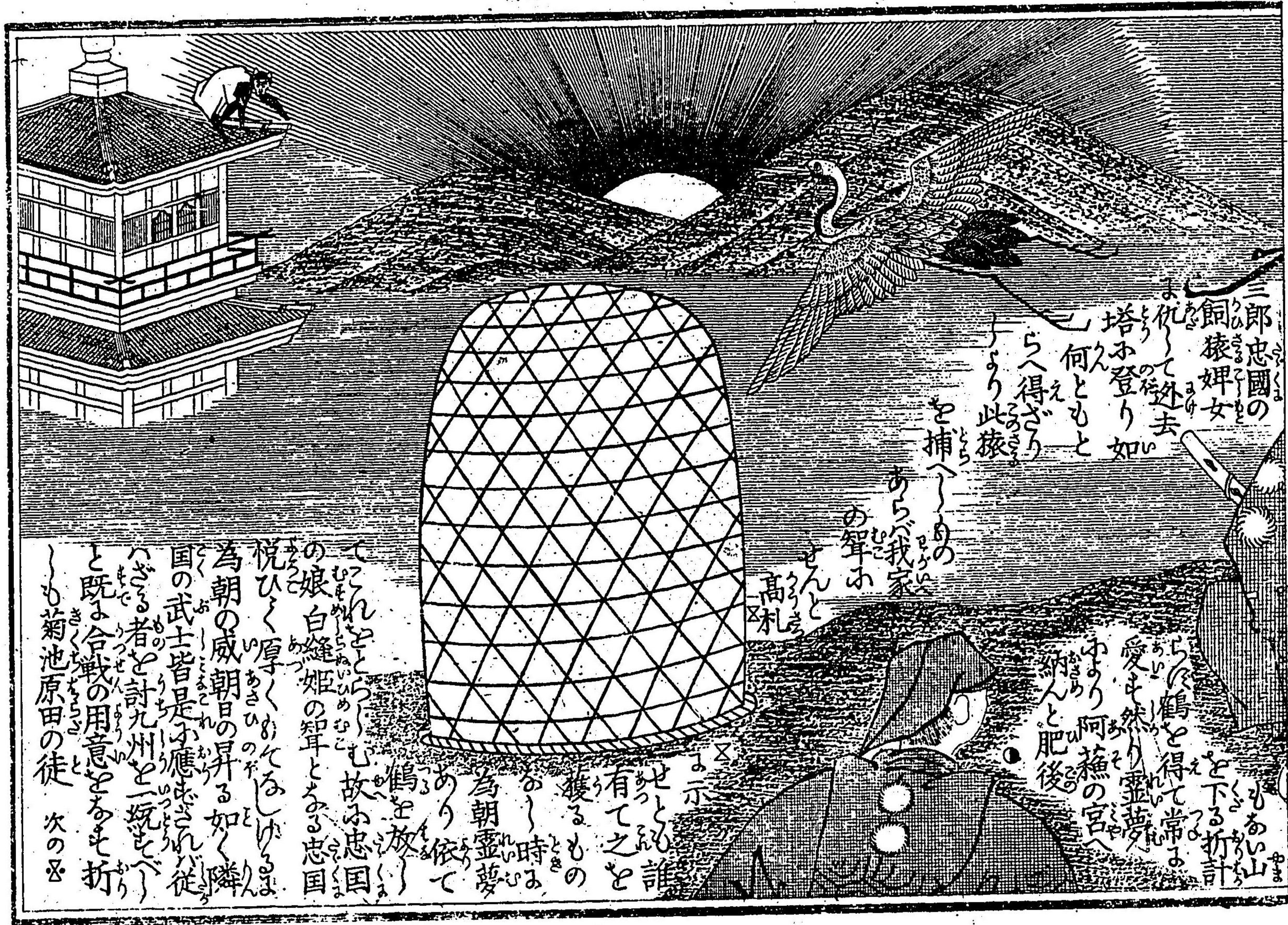


三郎忠國の  
飼養婢女  
何と登り如  
らへ得ざり  
より此様  
を捕へ  
の  
もあ  
折計  
と下る  
愛と然り  
納めり  
肥後  
朝の喜平  
治と



為朝  
のうり逢  
さゆ道  
ま迎ひて  
是ふ  
國阿蘇赴  
愛ふ阿蘇  
中の  
りて父の勘氣  
得須藤九郎重季一人を俱して筑紫の果  
と立出けりある日山狩りぬ道ふ一人の男頭れ出その形獵夫あれども  
寸矢と持び礼と云ふして為朝ふ云御曹子の  
無と知るこれの條の喜平治ありと主従の約  
とある重季重八又

後季重  
雷の為小  
死に依て為  
朝の喜平  
治と



三郎忠國の  
飼猿婢女  
を捕へ  
何ともと  
ら得ざり  
より此猿  
を捕へ

あら我家  
の智ふ  
高札

鶴と得て常  
愛せ然り  
納り阿蘇の宮へ  
肥後

悦ひく厚く  
為朝の威朝日の昇る如く隣  
国の武士皆是小應  
と既合戦の用意をせ折  
も菊池原田の徒 次

為朝靈夢  
あり依て  
鶴を放



為朝  
のうり遅  
さめ道  
よ迎ひて  
是ふ  
阿蘇へ赴く  
愛ふ阿蘇

後季重  
雷の為小  
朝の喜平  
治と

の達人あり生れ  
 あらうあて弓手の  
 肘甲伸く如あり  
 百事已まふく奉  
 動ける時は近衛院の  
 仁和元年為朝や十  
 三才ありぬひうぐ  
 尋常の丈夫ふからむ  
 父為義も常み舌を  
 るひ居けるとをある日  
 少納言信西新院の御



所ふおぬく韓非子といふ  
 書を講述  
 もも折  
 為朝  
 も聴  
 門とゆる  
 され御階  
 の下居  
 が此こと畢りて  
 弓の講談の末信西と口  
 論式成則員り矢と取  
 奉と頭も然れども故あ  
 中の口



為朝



軍と起し寄来ると  
聞へし程は逆寄して  
破るべしと忠国と案  
内として彼城に押寄  
只戦ふ城と落  
何れも勇き  
中も紀  
平治の碌  
手  
取与次郎  
組打方  
夫不當あり  
為朝



為朝一年の中九州  
を平吞せし國民  
稱讃して鎮  
西郎とのと申ける者も  
為朝の鶴と献がよとの  
院宣のよと申けるもの  
鶴の放ちゆり今  
琉球國本渡り  
居るとのこと故紀平治と  
後て彼の國へ  
渡り旅館ふ  
ありて鶴の行衛と

奇月

五









岸此所

為朝



为天丸

為朝



拔群  
 忠臣  
 稱  
 爲朝臣下  
 大里抄司と稱し其後爲朝并  
 仙七雲中へ入りて行方と知るるれ  
 舜天丸の琉球と一統して舜天王と稱  
 國政を執りて子孫繁榮せり爲朝  
 八代小島正位八郎明神と崇め祭り

然り  
 灼

明治二十年八月廿日御届  
 東京日本橋區若松町十五番地  
 編輯兼出版人 尾關トヨ

定價三錢

